

中学・高校生における生鮮野菜名の認知とその情報の関連 武藤八恵子、吉野祐子（くらしき作陽大）

目的 中学・高校生の野菜摂取の関心を高める教材開発をするため、彼らの生鮮野菜名とその知識の入手経路や最近のトピックスとして外国産野菜への関心の実態を調査した。

方法 2校ずつの中学・高校におもむき、10種類の野菜を実物提示し、名前をあてさせ、更に好み、食経験、情報入手の方法、外国産野菜の知識をアンケート調査した。

結果 野菜名の最も誤答が多かったのは小松菜（65.7%）で無記名が多かったのはサインゲン（25.7%）であった。ブロッコリー、ナスは正解が98.9%、92.5%と殆どの生徒が知っていた。中学高校別では中学生の方がコマ・細ねぎ・小松菜（危険率1%）、山芋・里芋（危険率5%）で正解が多く、サインゲン・サント（危険率5%）は高校生の方が多かった。家庭科学習を重ねることで野菜名の認知が高くなるとは言えない。性別では中学では女子が高かったが高校生では差がない。名前の入手経路は家庭の食卓からが89%と多く、家庭科の授業からが16.7%で最も少ない。教科書記載の情報も豊かであるとはいえない。外国産野菜の流通について知っている生徒が82.6%存在していたが、「あまり気にしたことがない」生徒が64.6%いて、農薬・防腐剤、遺伝子組み換え食品などとの関連性を認識していなかった。

野菜名の正解度を基に二群に分割し、アンケート項目との関連をみたところ、食経験や好嫌度は関連したがその他の項目は関連しなかった。これらの結果から、生徒の野菜に対する関心を高めるために、個別の野菜の情報提示や購入体験、実習題材の見直しなど、学習内容や方法に対する改善の示唆を得た。